

下部消化管内視鏡検査(大腸カメラ) 説明、同意書

下部消化管内視鏡検査は、肛門から内視鏡を挿入し、大腸を観察し診断を行う検査です。消化管の状態を詳しく把握するために、必要に応じて色素液の散布や生検(組織検査)等を行います。切除可能なポリープがあれば切除することも可能です(10mm未満のポリープはスネアという金属の輪っかをかけて必要に応じて電気を流し切除します。それよりも大きなポリープは治療時に出血したり穿孔(消化管に穴があくこと)のリスクが高くなるために病院様にご紹介させていただきます)。検査を楽に受けていただくために、当院では鎮静剤(眠くなる薬)、鎮痛剤(痛み止めの薬)を使用することが可能です。使用するか否かについてはご相談下さい。検査前日の夜に自宅で下剤を服用して頂き、検査当日も当院あるいは自宅で下剤を飲んで頂きます。便がきれいになった段階で肛門に局所麻酔を行い検査を開始します。検査時間は腸の状態によりますが、20分～50分程度です。ポリープ切除を行った場合には50分程度かかることもあります。

検査に伴う危険性には以下のものがあります。

1. 局所麻酔によるアレルギー(ショックなど)が0.01%(1万人に1人)程度見られます。
2. 下剤によるアレルギー(ショックなど)、嘔吐、腸閉塞、腸炎、腸穿孔などを起こす可能性があります。
3. 出血がおおよそ1～3%、穿孔が0.069%に見られます。血をさらさらにする薬を飲んでいらっしゃる方は出血のリスクが高くなります。しかし血栓症(脳梗塞や心筋梗塞など)予防の点から、処方医の指示がない限り自己判断で薬を中止しないでください(中止にて脳梗塞や心筋梗塞などが発症することがあります)。出血のリスクが高いと判断した場合には生検やポリープ切除は行いません。出血や穿孔の状態によっては輸血、内視鏡治療、血管内治療、手術等が必要になることがあります。
4. 鎮静剤、鎮痛薬を使用すると、血圧低下や呼吸抑制(0.0078%)が起こることがあります。アルコール摂取者や使用している薬によっては鎮静剤が効きにくい方もいます。検査当日は車、バイク、自転車などの運転は絶対にしないでください。公共交通機関をご利用ください。また、ご高齢の方はご家族同伴でのご来院をお勧めします。検査終了後、30分～60分お休みいただいてからご帰宅頂きます。
5. 消化管の動きを抑える薬を使用した場合、心臓病、緑内障、前立腺肥大、糖尿病を悪化させる恐れがあります。
6. ポリープ切除を行った場合には数日後に出血をきたすケースがあります(1週間以内が多いです)。治療後1週間は、消化の良いものを摂取し、アルコールや刺激の強いものは控えてください。また、体力を使う運動(ジョギングやゴルフ等含む)、出張、旅行なども控えてください。

代替可能な検査

内視鏡検査以外に、バリウムなどの造影剤を用いた注腸検査や大腸CT検査があります。しかし、組織検査や治療を行うことはできません。

検査による合併症や、偶発症は非常に稀ですがあります。適切に対応させていただきますが、症状によっては入院や手術が必要になったり、死亡例があると言われております。上記内容についてご同意いただける場合はご署名をお願いいたします。

上記検査内容について説明しました。

年 月 日 説明者名 _____ 印 _____

このしたクリニック院長殿

私は、下部消化管内視鏡検査の必要性、合併症など上記事項について十分に説明を受けました。内視鏡検査を受けることに同意します。

年 月 日 患者氏名 _____ 印 _____

代理人 _____ (続柄 _____)

このしたクリニック